法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-03-14

オモロ研究史 ： いわゆる新オモロ学派を中心に

島村，幸一

(出版者 / Publisher)
法政大学沖縄文化研究所
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
沖縄文化研究 / 沖縄文化研究
(巻 / Volume)
40
(開始ページ / Start Page)
31
(終了ページ / End Page)
92
(発行年 / Year)
2014-03-31
(URL)
https://doi.org/10.15002/00009984

Hosei University Repository

オモロ研究史

―いわゆる新オモロ学派を中心に―

島村幸一

はじめに

本稿は、『古代歌謡研究』（笠間書院、二〇一四年刊予定）に書いた拙論「オモロ研究史―仲原善忠の研究を中心に」の続編である。前述の論では、戦後のオモロ研究の中心であった仲原の研究は、戦前の研究の中心にいた伊波普猷のオモロ研究と連続していなく、仲原の研究は伊波の研究を批判し乗り越えようとした研究であったこと、その仲原の研究は実は戦前の勝れた琉球歌謡史論をあらわした世礼国男の研究に強く影響されていたこと、また世礼の研究から戦後のもう一人の勝れたオモロ研究の成果を出した小野重朗の研究も出たこと等を論じた。本稿は、世礼国男もその一員だといわれてい

Hosei University Repository

る新オモロ学派の研究に焦点をあてて、新オモロ学派の具体的な研究を検証していく。

今日新オモロ学派の研究成果は、島袋全発の「おもろさうしの読み方―展読法の研究―」（『沖縄教育』一九八号、一九三三年一月）がよく知られているが、実はその当初から宮城真治が草稿「『おもろさうしの読法―展読法の研究』に対する卑見」（草稿は少なくとも二篇からなり「昭和七年十一月二十四日」と「二十七日」の日付がみられる）を書き、自らのオモロ解読を「補填法」（当初は「填読法」としている）と称して全発の「展読法」の批判をしていることが分かっている。このことは、早くに末次智が「宮城真治と新おもろ学派」、中鉢良護が「折口信夫の〈沖縄〉と宮城真治」（下）[1]で指摘している。本稿では、全発の「展読法」を紹介しながら合わせて宮城の草稿、及び新オモロ学派のもうひとりの中心人物であった比嘉盛章の「展読法」をみて、全発の「展読法」の問題点を探っていく。その際に新たな資料として、那覇市歴史博物館の企画展示「川平朝申と沖縄文化」（二〇一二年九月一日から十月三十一日）で展示された川平朝申の資料『おもろ研究』（以下、川平資料とする）[2]を取り上げる。川平資料は、台湾から戦前刊行された雑誌『南島』第二輯（南島発行所、一九四二年五月刊）、第三輯（台湾出版文化、一九四四年九月刊）に掲載された「おもろ研究」の研究会のテクストであることが確認された。これを含めながら、比嘉盛章の「展読法」をみていく。最後にまとめとして、宮城が「填読法」を考えたきっかけとなった東恩納寛惇の『大日本地名辞書』「琉球」に引かれたオモロの記述や「おもろ新人」（新オモロ学派）によって批判された伊波普猷のオモロ解読も

Hosei University Repository

検討してみたい。本稿は『おもろさうし』の研究史として、島袋全発や宮城真治、比嘉盛章のオモロ研究を探り、新オモロ学派の実像に少しでも迫ろうとするものである。

新オモロ学派

「新おもろ学派」といわれる人々の活動は、一九三二年頃からだとされる。「新おもろ学派」の中心人物だとされる島袋全発の令弟、島袋全幸が記した「新おもろ学派のこと」には「この研究会は、昭和七年八月ごろの発足である。場所は島袋全発の自宅で、毎週一回（水曜日）夜開いたが、皆が非常に楽しんで、長期間つづいた。研究会のメンバーは、島袋全発（当時、県立二高女校長）を中心に、比嘉盛章（沖縄日日新聞理事）、宮里栄輝（県立図書館司書）、渡口政興（県立二高女教諭）、大湾政和（男子師範教諭）、阿波根朝松（県立二中教諭）、世礼国男（県立二中教諭）、上里忠宣（県立二高女教諭）であった。宮城真治は国頭郡で小学校校長であったから、会員ではないが交流をもっていた。この会の特色は、毎週の講読会の外に、毎月一回古典音楽演奏会を開いたことである。比嘉と大湾が安富祖流、阿波根と世礼が野村流で、琉球音楽のたしなみが深かったので、三弦を弾き、渡口政興（玉城盛重高弟）が素踊りをした。笛には仲地昌克が臨時参加した。時には、伊佐川世瑞、金武良仁の琉球音楽の両大家を招待して鑑賞会を開いた」とある。[3] 前述した末次「宮城真治と新おもろ学

Hosei University Repository

派」で既に指摘されているが、草稿「『おもろさうしの読法―展読法の研究』に対する卑見」により宮城真治は研究会の「第八回目」（一九三二年十一月二十三日）から「第十二回目」（一九三二年十二月二十一日）まで出席しているというメモ書きがあり、「第八回目」の出席の時点で会員になっていること、「第一回目」が一九三二年十月五日からであること、会の名称は「沖縄神歌学会」であることなどが分かる。ただし、全発の「おもろさうしの読み方―展読法の研究―」では、この会を「おもろ研究会」としか記していない。それはともかくとして、「新おもろ学派のこと」が記すように研究会の会員には、島袋全発をはじめとして、比嘉盛章、宮城真治、世礼国男等がいたことが分かる。また、彼等を「新おもろ学派」と称するのも『沖縄日日新聞』一九三二年十二月の記事が「一九三二年を送る　新おもろ学派の華やかな出発」[4]と報じており、当時からその名称が使われていたことが分かる。ただ、東恩納寛惇は全発等を「おもろ新人」としか言っていない。[5]これを考えれば、あるいは「新おもろ学派」という名称は、比嘉盛章が理事をしていた沖縄日日新聞の掲載でもあり、比嘉自身が名付けた名称だった可能性がある。会の名称が「沖縄神歌学会」だったことと合わせて、新たなオモロ研究を切り開こうとする意気込みや自負がこれらの名称に込められていたかもしれない。

研究会の発足時期を島袋全幸は「研究会は、昭和七年八月ごろの発足である」（「新おもろ学派のこと」）とするが、前述したように宮城の草稿では「第一回目」が一九三二年十月五日となっていてずれがある。草稿には「私は其れが初めて新聞紙に発表された時には画期的な大研究として大きな衝撃

Hosei University Repository

を与へられました」（「昭和七年十一月二十四日」）と記している。また、「昭和七年（一九三二）十月二十日稿」と記される伊波普猷の新聞掲載論文に「おもろ神のみせせる」（『沖縄朝日新聞』一九三二年十一月一日から十三日連載）があり、論文の末尾に「青年神歌学徒（ヤングオモロニヤン）も、その研究の初穂は、どうかこの古典研究の先駆者〔筆者注。田島利三郎のこと〕の霊に捧げて貰ひたい」[6]という記述がある。これは、伊波への批判を含む新オモロ学派の研究に対して苦言を述べた記述であるが、少なくとも伊波は「おもろ神のみせせる」を執筆する以前の時点（一九三二年十月二十日）で、沖縄での新たな研究会の発足とその成果の一端が新聞等に発表されたのを知ったことが示されている。また、宮城の草稿の内容からも全発が「おもろさうしの読み方—展読法の研究—」を発表する以前に、活字論文以上に多くのオモロを「展読」していると考えられる全発の草稿があり（後述）、宮城はそれを読んだ上で草稿を記したと考えられる。このことから、末次が指摘するように「沖縄神歌学会」はその発足以前に全発を中心とした内輪の研究会があって、それが島袋全幸の記す「研究会は、昭和七年八月ごろの発足である」という記述に繋がるかもしれない。新オモロ学派の活動は、「昭和七年八月ごろ」からということになろうか。

さて、新オモロ学派が新オモロ学派たる所以はどこにあるのか。先に記した新聞記事「一九三二年を送る　新おもろ学派の華やかな出発」には、「華々しかつたのは、新おもろ学派の進出である。この派は伊波普ゆう氏によつて集大成された『おもろ草紙』に先づ音楽上から疑問を抱き、その原形を

Hosei University Repository

展開した結果、所謂正読法に到達し、伊波氏の取つた草紙の解釈とは、根本的にことなつた読をも発見する」とある。「『おもろ草紙』に先づ音楽上から疑問を抱き、原形を展開した」「所謂正読法」は、「展読法」のことだろう。注6で示した伊波のオモロ解釈を乗り越えようとする全発の新解釈の提示もそのひとつといえるが、新オモロ学派の登場がオモロを解読する上で重要な問題を提起したとするのは、やはり「展読法」の提示だということになろう。以下、まず島袋全発が展開する「展読法」を紹介しながら検討していく。

島袋全発の「展読法」

新オモロ学派のオモロ理解を代表していると考えられる島袋全発の「おもろさうしの読み方―展読法の研究―」は、オモロをどのように読んでいるのか。全発の論文に沿って紹介すれば、「改訂本の巻頭の伊波さんの例言」（後述）にある「おもろの短章は、伊波さんの云はれる第三形式が多い。成程この法則をあてはめて見ると、極めてリズミカルになる」として、〈例1〉を〈例2〉のように「展読」するのだという。[7]

〈例1〉第五－二八九

Hosei University Repository

一英祖にやのうちや　歓へ侍ら　誇り侍ら
又てだがうちやれば

〈例2〉
一英祖にやのうちや　歓へ侍ら　誇り侍ら
二てだがうちやれば　歓へ侍ら　誇り侍ら

全発は〈例2〉のように「展読」するのは、「従来は多くの人にこの侭読み味はれて居たが、それでは、もの足りないから、これを二聯詩に」するといい、また「謡ひものとしては勿論、読みものとしてもかうなければならない」と記している。すなわち、全発は「第二聯」に「歓へ侍ら　誇り侍ら」の記載の省略を認め、それを補って「展読」していることが分かる。このような理解の仕方は、その理由は別にしても「英祖にやのうちや」と「てだがうちやれば」を連続部（対句部）と捉え、「歓へ侍ら　誇り侍ら」を各節に繰り返す反復部（繰り返し部）だと捉える現在のオモロ理解と一致している。全発は同様な例として第五－二二三を示した後、「複雑な詩形」だという〈例3〉をあげ「その侭読んでいたところ」、「琉球音楽を嗜む比嘉盛章氏と共に研究した際に、氏より釈然として示教された」と記し、〈例3〉を「降れて　遊びよわれば　天が下　たいらけて　ちよわれ」が「繰返

Hosei University Repository

しになつてゐて「とよむ勢高子が」は「聞得大君ぎや」と、最終行の「真玉森城」は前の行の「しより森城」と同じ旋律で謡はれたらしいと云ふのである（琉球音楽の歌詞の繰返し文句は略記するとか）」と述べて、〈例4〉のように「展読」したとする。

〈例3〉第一－一

あおりやへがふし
一聞得大君ぎや　降れて　遊びよわれば　天が下　たいらけて　ちよわれ
又鳴響む精高子が
又首里杜ぐすく
又真玉杜ぐすく

〈例4〉

一聞得大君ぎや　降れて　遊びよわれば　天が下　たいらけて　ちよわれ。首里杜ぐすく
二鳴響む精高子が　降れて　遊びよわれば　天が下　たいらけて　ちよわれ。真玉杜ぐすく

今日の理解では、オモロに付される「一」「又」記号は、前者がウタの始まりを示す印、後者が音

Hosei University Repository

楽的な繰り返しを示す印とする理解をしている。すなわち、〈例3〉は「又」の記載がある「鳴響(とよ)む精高子(せだかこ)が」以下に、「降(お)れて　遊(あす)びよわれば」以下が各節に繰り返される四節のオモロとするのが、一般的な解読である。[8] これに対して、全発はこれを「二聯」のオモロとして「展読」し、第一節の詞章「聞得大君(きこゑぎみ)ぎや」以下と二つ目の「又」の詞章「首里杜(しよりもり)ぐすく」をそのまま繋げて第一聯とし、同じく第二節の詞章だと考える「鳴響(とよ)む精高子(せだかこ)が」以下に「降(お)れて　遊(あす)びよわれば　天(てん)が下(した)　たいらけて　ちよわれ」の記載の省略があると理解してそれを補い、さらに三つ目の「又」の詞章「真玉杜(まだまもり)ぐすく」をそのまま繋げて第二聯としている。これはオモロ解読にあたって、連続部（対句部）と反復部（繰り返し部）を想定し、反復部が各節に繰り返されると考える現在のオモロ解読とは大きく異なる。また、全発は「「ぎや」〔筆者注。「聞得大君(きこゑぎみ)ぎや」の「ぎや」〕」が、今日、ヂヤと発音されているのから見ると、繰り返す同じリズムの同音を避けて、第一聯では「ぎや」となり第二聯では「が」〔筆者注。「鳴響(とよ)む精高子(せだかこ)が」の「が」〕と読みます。否うたはした古人周到の用意であろう。八音六音の詩句ばかりでなく、相当複雑な格調の高い詩形である事が知られる」とも記している。しかし、これについても格助詞〈が〉が「ぎや」と記されるか「が」と記されるかの違いは、〈が〉が接続する語の音環境によって〈i〉母音に接続すれば口蓋化して「ぎや」と表記されることが多いことが分かっており、[9]「古人周到の用意」などではない。さらに、全発は〈例5〉をあげ、〈例6〉のように「展読」している。

Hosei University Repository

〈例5〉第一－三

あおりやへがふし
一聞得大君ぎや　世添うせぢ　みおやせば
　千万　世添わて　ちよわれ
又鳴響む精高子が
又聞ゑ按司襲い
又鳴響む按司襲い
又首里杜ぐすく
又真玉杜ぐすく
又大君す　守らめ

〈例6〉

一聞得大君ぎや　世添うせぢ　みおやせば千万　世添わて　ちよわれ　聞ゑ按司襲い。首里杜ぐすく
二鳴響む精高子が　世添うせぢ　みおやせば千万　世添わて　ちよわれ　鳴響む按司襲い。真玉

Hosei University Repository

杜ぐすく
反歌
大君す　守らめ

全発が〈例5〉を「二聯」のオモロとして〈例6〉のように「展読」するのは、以下が理由であるという。

第一章〔筆者注。〈例3〉の第一－一のこと〕に比べて「又」の記号のある句が三行丈け多い。即ち第三、第四行〔筆者注。「又聞ゑ按司襲い」「又鳴響む按司襲い」の行〕及第七の最終行〔筆者注。「又大君す　守らめ」の行〕である。第三、四の二行をスタンザ〔筆者注。節のこと〕の初に持っていくかしまひ方にもっていくかが問題で、若しこれを起句〔筆者注。節の冒頭句〕とするならば、当然第五、六の「首里森城」「真玉森城」も起句となるべく或は「大君すまぶらめ」まで起句とすれば、条理一貫するが、意味は朦朧混沌となるであろう。私は

聞得大君（女性）が、世を治らす霊威を献げませば、千代万代在位て、しろしめせ、名だたる

按司添（男性）よ。首里森城なる。

と云ふ意味にとつたから、右の通り読むのである。（途中略）

Hosei University Repository

「大君す　まぶらめ」の最終行を反歌としたのには、私に相当の理由がある。この行には対句がない。それで第一聯第二聯の最後に附けて、繰り返し読んでもいゝやうだが、それでは「又」の記号が怪しくなる。「又」の記号を冠した行は第一回しか読まない、否謡はなかつたと云ふ原則に私は忠実であり度い。幸にして、万葉集の反歌、琉球音楽の返しでこれを保証するであろう

全発が〈例6〉のように「展読」するのは、このオモロの「第一聯」は「聞得大君（女性）が、世を治らす霊威を献げませば、千代万代在位て、しろしめせ、名だたる按司添（男性）よ。首里森城なる」とすれば「朦朧混沌」としない解釈が出来ること、「最終行を反歌とした」のは「この行には対句」がなく、「「又」の記号を冠した行は第一回しか読まない、否謡はなかつたと云ふ原則」があること、「万葉集の反歌、琉球音楽の返し」が「保証」することだというのである。〈例4〉の「展読」もそうであったが、三節以上のオモロを全発が「二聯」で「展読」しているのは、「「又」の記号を冠した行は第一回しか読まない」という「原則」を考えていたことが分かる。この考え方がどこから出てきたのかは不明だが、前述したように「一」をオモロの始まり、「又」を音楽的な繰り返しを示す印と理解する現在のオモロ理解とは、大きく異なった理解である。

ただし、全発は必ずしも〈例3〉や〈例5〉のような三節以上のオモロを全て「二聯」にして「展読」してはいない。「おもろさうしの読み方―展読法の研究―」の末尾に載る第三-九一、第十三-

Hosei University Repository

七六三、第五－二一二の「展読」は、最終節まで記載の省略を想定して、それを補って「展読」している。第三－九一（〈例7〉）は、以下のような表記のオモロである。

〈例7〉第三－九一

かぐらとよでふし
一聞得大君ぎや
鳴響む精高子が
君々しよ　よしれ
又いせゑけり按司襲い
吾がかい撫でたゝみ子
君々しよ　よしれ
又大ころ達　おより
もりやゑ子達
君々しよ　よしれ
（以下省略）

Hosei University Repository

〈例7〉は十五節にも及ぶオモロである。多くのオモロでは第二節以下の繰り返しの詞章の記載を省略するが、〈例7〉は繰り返しの詞章（「君々しよ　よしれ」）が第二節、第三節、第五節、第九節、第十四節と最終節の第十五節に、一部だけの詞章の記載も含めて表記されている。全発はそれを全節にわたって繰り返しの詞章があると考えて、「展読」している。第十三－七六三、第五－二一二も、同様な例としてあげている。

この外、全発が「展読法」に言及する論文は多くないと思われるが、「おもろさうしの読み方―展読法の研究―」以降、『琉球新報』に書かれた「中山世鑑のオモロ」でも、『中山世鑑』記載のオモロと『おもろさうし』に書かれたオモロ（第十二－七三三）との記載の違いを指摘して『中山世鑑』記載のオモロの一部に繰り返しの詞章の一部の記載があることを述べて、自らの「展読法」の正しさを記している。[10] また、「おもろさうしの読み方―展読法の研究―」とほぼ同時に書かれたと考えられる『創立五十周年記念誌　浦添（尋常高等）小学校』（一九三二年十一月刊）に載る「うらおそいオモロより」（「七月二十五日稿了」とある）には、浦添関連のオモロを十余首引いて解説しているが、三節以上のオモロを含めて、すべての節にわたって繰り返しの記載の省略を想定して、それを補って「展読」している。したがって、厳密には全発がどのようなオモロを〈例3〉や〈例5〉のように「二聯」のオモロとして考えているのかなお不明であるが、前述したように「おもろさうしの読み方―展読法の研究―」では、明らかに幾首かのオモロを今日の理解とは違う方法で「展読」している。これ

Hosei University Repository

が以下述べるような宮城からの批判になっているのである。

宮城真治の全発批判

宮城真治は、草稿「『おもろさうしの読法―展読法の研究』に対する卑見」を記して、その当初から全発の「展読法」を批判している。これは注目すべきことである。今日、新オモロ学派と称する人々の研究は、必ずしも島袋の論文に示される捉え方だけではなかったのである。宮城は、「◎展読法と私の所謂填読法（区別のために仮にさう云ふて見たのであります）とは常に必ずしも相違するものではありません。両者が一致するものも随分あります」として、〈例1〉第五－二八九をあげ、「私の見る填法も其の通りであります」と記している。しかし、草稿の冒頭には「展読法がとんでもない迷路に陥って居はせぬかといふことに気が附きました（途中略）おもろの章によっては全く其の読方を変更せねばならぬものも多々あるやうに思って居ます」として宮城は〈例8〉のオモロをあげ、全発は〈例9〉と「展読」するが自分は〈例10〉のように「填読」するとしている。[11]

〈例8〉 第十四－九九一
一東方（あがるい）の真下（ました）に

Hosei University Repository

桑木下　吹く鳥
吾が思ひが
声　鳴り出ぢゑて
又聞け〳〵　肝人
肝人す　聞ゝ取れ
又てだが穴の真下に

〈例9〉

Ⅰ

東江のま下に
桑木もと　鳴く鳥
我が情人が
声なり　出ぢゑて
聞け〳〵　有情人

Ⅱ

てだがあな（東）の　ましたに

Hosei University Repository

くわ木もと　ふくとり
あが　おもひが
こゑなり　いぢて
肝ちゆす　ききとれ

〈例10〉

Ⅰ

あがるいの　ましたに
くわけもと　ふくとり
あか　おもひが
こゑなり　いぢゑて

Ⅱ

きけ〳〵　きも人
きも人す　ききとれ
あか　おもひが
こゑなり　いぢゑて

Hosei University Repository

Ⅲ

てだがあなの　ましたに
くわげもと　ふくとり
あか　おもひが
こゑなり　いぢゑて

末次が指摘するように、全発の論文「おもろさうしの読み方―展読法の研究―」には〈例8〉のオモロは取り上げられていない。宮城がそれを取り上げて全発批判をしているのは、論文が活字化される前の全発の草稿、ないしは研究会の発表を前提としているからであろう。宮城の「補填法」（「填読法」）による全発批判は、今日のオモロ理解からすると明解である。〈例8〉を「一」と「又」の表記から三節（三聯）のオモロと捉え、「吾が思ひが　声　鳴り出ぢゑて」の記載が略されていると考えて、これを「補填」している。宮城が「御覧の通り此れ〔筆者注。〈例10〉のこと〕と彼れ〔筆者注。〈例9〉のこと〕とは可なりの隔があります。詩としての価値は果して何れがよいか。見るべき人によって異なるものがあると思ひます。然しそれは私どもの関わるべき問題ではありません」と記していることは注目される。引用した全発の論文で分かるように、全発の「展読法」には全発個人のオモロ解釈が前提になっている。しかし、これを宮城は「見るべき人によって異なるものがあると思ひま

Hosei University Repository

す。然しそれは私どもの関わるべき問題ではありません」と明確に指摘している。すなわち、宮城はオモロの理解は、個人による解釈が先にあるのではなく、まずオモロの詩形的な理解が重要であると指摘しているのである。これは、宮城のオモロ研究の高さを示す勝れた見解である。

宮城の草稿は「おもろさうしの読み方―展読法の研究―」に取り上げられていない活字化される前の全発の草稿、あるいは「沖縄神歌研究会」で発表したと思われるオモロの「展読」について、それをいちいち取り上げて全面的に批判している。その批判は、正確である。〈例5〉についても、宮城は〈例11〉のように「補填」している。

〈例11〉

あおりやへふし

一

きこゑ大君ぎや

世そうせぢ　みおやせば

千万

世そろて　ちよわれ

Hosei University Repository

二

とよむせだかこが
世そうせぢ　みおやせば
千万
世そろて　ちよわれ

三

きこゑあんじおそい
世そうせぢ　みおやせば
千万
世そろて　ちよわれ

四

とよむあんじおそい
世そうせぢ　みおやせば
千万
世そろて　ちよわれ

Hosei University Repository

五

首里もりぐすく
世そうせぢ　みおやせば
千万
世そろて　ちよわれ

六

まだまもりぐすく
世そうせぢ　みおやせば
千万
世そろて　ちよわれ

返し

大きみす　まぶらめ

Hosei University Repository

宮城は「世そうせぢ　みおやせば　千万　世そろて　ちよわれ」が各節に繰り返されるとみなし「補填」して、「六段」（六聯）のオモロとしている。これは、全体を「二聯」とする全発の「展読」とは大きく違っている。また、宮城は「第一段と第二段の初が「きこゑ大君ぎや」若くは「とよむせだかこが」となってゐるのに、第三段と第四段が「きこゑあんじおそい」若くは「とよむあんじおそい」となってゐて「ぎや」若くは「が」が附いて居ないのは注意すべきことと思ひます。「あんじおそい」は受身になってゐるからでありませう」とも記している。これは連続部と反復部の意味的な繋がりに及ぶ問題の指摘であり、ひとつひとつ検証する必要があるが、助詞の有無にまで及ぶ指摘は注目される。前述したように二節だけの「短章」のオモロは別として、宮城の「補填法」（「填読法」）と全発の「展読法」とは、大きく異なっていることが分かる。ただし、「最後の行を反歌とされたことは（途中略）是れは卓見であると信じます。私は今まで全く其れと気付きませんでした。此の「おもろ」を私の所謂補填からすると是れを六段とし最終の行を貴説に従って反歌若くは「返し」として添へたものと見たいと思ひます」と記し、全発を支持している。後述するが、「最後の行」（最終節）をそれまでの「段」（「聯」）と分けて理解する考え方は、後述する比嘉盛章が大きくかかわった川平資料や雑誌『南島』第二輯にもみられる。当時、支持された捉え方だったと推測される。

末次が指摘するように、宮城のオモロ研究は今日のオモロ研究の水準に達するものであり、驚くほど水準が高い。宮城が「展読法」を批判するなかでしばしば記しているのは、伊波の『校訂　おもろ

Hosei University Repository

さうし』のオモロの改行の仕方である。宮城は、これが全発の「展読法」を誤らせると指摘している。全発等が「校訂本」でオモロを研究するのに対して、宮城は「私のおもろ研究は校訂本の出るまでには一通り進んでゐました。私は原本から筆写して密かに研究してゐました」と記している。宮城はおそらく当時、沖縄県立図書館に入っていた『おもろさうし』で研究していたのであろう。当時の県立図書館には「首里王府編　康熙四十九年」とする六冊本と三冊本の『おもろさうし』、「おほみよのひかり　おもろの本歌　田島利三郎編　明治三十四年　一冊」、「くめの二間切おもろおそうし（ママ）　天祐（ママ）三年　一冊」、「はひのおもろおそうし（ママ）　天祐（ママ）三年　一冊」、「あおりやへさすかさのおもろおそう（ママ）し　天祐（ママ）三年　一冊」が所蔵されていた。[12]「校訂本」のオモロの改行の仕方がどのように全発の「展読法」を誤らせることになるかはよく分からないが、〈例8〉の「展読」を批判した宮城の草稿の書き入れには「校訂本」が独自に入れた「又」記号へのコメントが記されている（注11参照）。これは、まさに宮城が「原本」でオモロを研究していた証しである。あるいは、その反対に以下の〈例12〉には、宮城は次のような見解を述べている。「実際の曲が知らないから〔筆者注。このオモロに「ふし名」が付いていないことをいう〕確定はしかねますが「ゑ、け、あがる、三日月や　ゑ、け、かみぎや、かなまゆみ」で其の曲が終るものとすれば其の次々も二行宛で一段で全章四段のおもろとなります。「又」の附いてゐる六つの行が各々一段宛であるとすれば初めの二行も一行宛で全章は八段となり、二行目の「ゑ、け、かみぎや、かなまゆみ」の上にも「又」の符号が附いてゐなければなりませ

Hosei University Repository

ん」とも記している。

〈例12〉

第十－五三四

一ゑ、け、あがる、三日月や
　ゑ、け、かみぎや、かなまゆみ
又ゑ、け、あがる、あかぼしや
又ゑ、け、かみぎや、かなまゝき
又ゑ、け、あがる、ぼれぼしや
又ゑ、け、かみぎや、さしくせ
又ゑ、け、あがる、のちぐもは
又ゑ、け、かみぎや、まなきゝおび

〈例12〉には、尚家本、仲吉本とも二行目の上には「又」がなく、『校訂　おもろさうし』、『校本おもろさうし』（仲原善忠・外間守善、角川書店、一九六五年刊）、『日本思想大系　おもろさうし』（外間守善・西郷信綱、角川書店、一九七二年刊）にも二行目には「又」が入っていない。しかし、

Hosei University Repository

このオモロは二節（二行）で意味的な連続性を持つオモロで、二節（二行）ごとに意味的に完結していると考えるのが分かりやすい。宮城のいうようにこのオモロは「全章は八段」で、二行目の上にも「「又」の符号が附いてゐなければなりません」とする指摘は妥当であろう。岩波文庫本『おもろさうし』（外間守善、二〇〇〇年刊）では、そのような理解をして「又」記号を補っている。[13] 宮城の草稿は「『おもろさうしの読法—展読法の研究』に対する卑見」となっているものの全発の「展読法」批判であるだけではなく、全発が「オモロ研究の二大収穫　附「やりかさ」「おしかさ」の意義」上・下を書き伊波のオモロ解釈に異議を唱えたのと同様に（注6参照）、伊波の『校訂　おもろさうし』に表現されたこれまでの伊波のオモロ研究全般に対する「おもろ新人」らしい批判なのである。宮城の草稿の末尾に綴られている以下の文言は、宮城のオモロ研究の深い見識が示されている。

◎神歌学会のこれまでの御研究は展読法に重点を置かれてゐたのではありませんか。否寧ろ展読法の発見によって学会が生れたとも見ることが能きはしますまいか。処がおもろの読方がさうむづかしいものではなく極めて簡単に補填能きるといふこととなれば学会の意義が幾分か沮喪することになりはしませんか。私はこれを恐るるものであります。おもろの研究は御承知の通りまだ成すべき多くの問題を残してゐます。従来発表されてゐる普通の解釈でさへ根本的に変更を要するくらゐではありませんか（以下略）

Hosei University Repository

宮城の「展読法」批判は、〈例11〉のようなオモロの最終節を「返し」として除く場合があるが、オモロの記載の省略を各節（「各段」）に考えていこうとする考え方である。「おもろの読方がさうむづかしいものではなく極めて簡単に補填能きる」というのは、解釈者の主観的な読み方によって「展読」が変わるのではなく、オモロをウタの詩形（すなわち歌形）として捉えれば、二節以下の記載の省略を「補填」するのは難しい問題ではないと述べているのである。これは、後に世礼国男が『琉球新報』に八十七回にわたって掲載した「琉球音楽歌謡史論」（一九四〇年四月二日～九月二十一日か）や台湾で刊行された雑誌『南島』第二輯に掲載した「久米島おもろに就いて」（一九四二年五月）で展開したオモロの解読法、「反復法」の先駆けとなるオモロ理解であり注目されなくてはならない。さらに重要な点は、宮城が「展読法」（宮城からいえば「補填法」）を問題とすることよりも、オモロ研究は「成すべき多くの問題」があると述べていることである。それは、前述したように伊波が刊行した『校訂　おもろさうし』のテクストにかかわる問題等、「従来発表されてゐる普通の解釈でさへ根本的に変更を要する」「多くの問題」があると指摘する点である。宮城のオモロ研究は全発の「展読法」批判を大きく越えていて、それまでの伊波を中心とするオモロ研究全般を問題にしていたことが分かる。宮城のオモロ研究は、オモロ解読のみならずオモロの正確なテクストへも及ぶ問題意識を持っていたのである。

Hosei University Repository

比嘉盛章のオモロ研究

前述したように、全発の「展読法」は「琉球音楽を嗜む比嘉盛章氏と共に研究した際に、氏より釈然として示教された」という。全発は〈例3〉のオモロの「展読」を説明する際に比嘉の「示教」を述べているが、「聞得大君ぎや」と「鳴響む精高子が」、「首里杜ぐすく」と「真玉杜ぐすく」は「同じ旋律で謡はれたらしい」ということ、「繰返し文句は略記する」ということがその「示教」であったと推測される。実際、今日比嘉がオモロをどのように解読していたかを充分に知る資料は確認できないが、管見の限りでは比嘉が『琉球新報』に二十回にわたり連載した「古琉球の国都は首里か浦添か？　おもろ文献より見たる浦添国都説の史学的価値」（一九三三年二月二十三日から三月十四日）[14]で、それを窺うことができる。連載の第二回目（二月二十四日）に〈例13〉第二－四二を〈例14〉のように引いた後、「此のおもろの読み方は私の研究仲間たる新おもろ学派によりて採用された展読法であるが吾等は今後如何なる場合にも常に之の読み方に従ふ積りであるから読者諸君は之れを諒として貰ひたい」と記している。

Hosei University Repository

〈例13〉第二－四二

おもろくさりおろちへがふし

一聞ゑ中城

東方に　向かて

板門　建て直ちへ

大国　襲う　中城

又鳴響む中城

てだが穴に　向かて

〈例14〉

一、きこゑ中城あがりに向かて

いちやぢや立て直ほちへ

だ国おそふ中城

二、とよむ中城てだが穴に向かて

かなぢや立て直ほちへ

だ国おそふ中城

Hosei University Repository

比嘉の引くオモロは、「二、」では「いちやぢや」（板門）の対句を「かなぢや」（金門）とした上で「展読」しており、厳密にいえば単純な「繰返し文句」の「略記」を補ったとはいえないが、三十余首のオモロを「展読」して引く際には、〈例14〉のようなかたちで「繰返し文句」の「略記」を補って記している。これは、三節以上のオモロであっても同様である。これが比嘉の示した「展読法」である。基本的には、宮城が全発批判をするなかで示した「補填法」と変わらないと思われるが、比嘉の「展読法」と全発の「展読法」は同じであるのか、あるいは異なるのか。全発の「展読法」が、「展読法」をタイトルにした論文であった故に、これが後に一人歩きして有名になってしまったのか。とすると、全発の「展読法」は新オモロ学派のメンバーが共有していたものというより、全発がその後独自に展開した「展読法」ということになるのか。

比嘉盛章のオモロ研究が新聞掲載の論以外に展開されているのは、全発の「おもろさうしの読み方—展読法の研究—」発表から九年後の一九四二年五月に台湾から刊行された雑誌『南島』第二輯（南島発行所）に発表された「おもろさうし研究」（第一回）、同じく一九四四年に刊行された『南島』第三輯に発表された「おもろさうし研究」（第二回）（台湾出版文化）である。「おもろさうし研究」には、比嘉の外、小葉田淳、金関丈夫、川平朝申、木藤才蔵、須藤利一、中村忠行、松村一雄、三島格（第三回目には小山捨男が加わる）が名を連ねているが、この研究会の中心にいた人物は比嘉盛章であった。『南島』第二輯に記された「編輯後記」（一九四一年十二月三十日、須藤利一記）には、以下

Hosei University Repository

に引くように台湾での「おもろさうし研究」の様子やそれを『南島』に掲載する事情等が記されている。

◇昭和十五年九月以降、比嘉盛章氏を中心とした「おもろ」研究会をやつてゐる。これだけは毎輯つづけて掲載して行きたいと思つてゐる。はじめは、座談会の記事のやうに、各人の意見などをそのまゝ書いて、もつと具体的に研究の内容を書き現はさうと考へてゐたが、速記でもしない限り、到底さうした形式によることは出来ないし、たとへ、さうやつたところで、まとまりがつきさうになかつたので、今度は思ひ切つて最も簡単な形式を一足とびに取つて、ごらんのやうなものにした。ローマナイズした訓読をつける計画もあつたが ―私なぞは大いにその必要と価値とを主張したのだが― 大事を取つて敬遠する賢明なる策が取られた。第二回からは、何んとかして、不賢明な策を敢て採りたいと思つてゐる

また、『南島』が出る経緯についても、須藤利一が記した比嘉盛章に対する追悼文ともいえる「比嘉盛章氏のことども」(『琉球新報』一九五五年九月十五日・十六日)によると、須藤は「昭和十四年の夏、与那国島〔筆者注。当時、比嘉は与那国小学校校長であった〕で初めて氏と会つて、それから親交」を結び、比嘉が「(昭和十四年の)秋は台北へ来て拙宅に四、五日滞在」して台北大学で講演

Hosei University Repository

し、その後、西表の租納小学校長に転任した際、「翌十五年」に比嘉に招かれて租納の「豊年祭（ブーリン）」を見学して、台北に戻った後「台北在住の同好の士の間で、「南島」という沖縄に関する機関誌を出版」する計画が図られたという。それは租納からの帰路「石垣町における喜舎場永じゅん、比嘉氏と私との会合」がきっかけになったからだと記している。この記事と照応する資料が、須藤利一が『南方民族』第六巻一・二号、一九四〇年三月刊に書いた「八重山の穂利祭―日記風に―」[15]にある。その「八月二十一日」の記事に、八重山の旧家に秘蔵されている古文書や土俗品が相当あるが郷土室や図書館が出来る望みが当分ないことから「郷土誌」を作ろうとする話が出て、「郷土誌」の「名前は「やえま」（八重山）はどうだろう」となったこと、「八重山の民謡の数々、未発表のユンタやジラバ」、「八重山島旧記や慶来慶田城由来記など先づ註入りで毎号載せる。方言を集めてのせる。古老の聞き書をのせる」、「創刊号には、比嘉さんの「京太郎に就て」をのせたい。喜舎場氏に毎号民謡を二つ三つ宛。比嘉さんの「オモロ研究」を毎号連載するのも八重山の言語研究の上でいろいろ役に立つだろう。と云ふ様な計画をし、大体相談がまとまつた」とある。同様の記事は『南島』第一輯の「編輯雑記」にも記されているが、第一輯は「八重山特輯」で巻頭に比嘉の「西表島の節祭とアンガマ踊」が載り、喜舎場永珣の「爬龍船の神事（黒島）」、「付録」に「八重山島由来記」「八重山島大阿母由来記」「八重山島諸記帳」「慶来慶田城由来記」が比嘉の「解説並びに語句解」が付いて載っている。『南島』の第一輯が「八重山特輯」であったのは、この雑誌発刊の経緯が、元々は比嘉や喜舎場、須

Hosei University Repository

藤等が図った「郷土誌」「やいま」が始まりであったからである。

さらに須藤の「比嘉盛章氏のことども」には、台北の「おもろ」研究会についても記されている。研究会は、比嘉が「かねがね台北へ出たいという氏の切望がかなつて総督府文教局の教科書編しゅうの仕事」が見つかって一九四〇年（昭和十五）に台北に移り住むことになり、比嘉と「沖縄研究のために集まつた人々との交際は、氏に非常な活気を与え吾々も沖縄のエンサイクロペディアの存在を心から有がたがつていた」とあり、「氏を中心にしたオモロ研究会は月一度拙宅で開かれ（途中省略）、約二年間つづき毎回、楽しい一夜を送るのが例であつた」と記されている。ただし、研究会が「月一度」とするのに対し、後述する川平朝申の「須藤利一先生と南島研究」（『八重山文化』第四号、東京・八重山文化研究会、一九七六年五月刊）では、「須藤教授宅を教室」にて「一週間一回七時から二時間開講した」とあり、異なる。それは別にしても、「比嘉盛章氏のことども」は、『南島』が出る経緯および台北の「おもろさうし研究会」の様子が記されており、須藤の並々ならぬ尽力とともにこれらに比嘉が大きくかかわっていたことが分かる。[16]

さて、本稿の冒頭で記したように那覇市歴史博物館の企画展示「川平朝申と沖縄文化」（二〇一二年九月一日から十月三十一日）で展示された川平朝申の資料『おもろ研究』は、川平の個人的なオモロ研究資料というよりも、比嘉が中心となっていた台北でのオモロ研究会のテクストであったと判断されるものである。川平資料は、『おもろさうし』第一－一～二三の途中までがガリ刷りの印刷で、

Hosei University Repository

第一－二三の途中から第三－二一までが活字印刷になっている。[17] 川平資料には川平の書き込みと思われるものがあるが、資料は第一にオモロ研究会のテクストであり、後述するがその書き込みも研究会で交わされた情報が記入されたものと考えられる。そして、そのテクストを作成した人物は、須藤の記事から比嘉盛章と推測されるのである。つまり、これが前述した比嘉の「古琉球の国都は首里か浦添か?」以降のオモロ研究の具体的な資料である。

雑誌『南島』には第二輯から「おもろさうし研究会（第一回）」と題される「注釈研究」が載り、その「まへがき」に「一比嘉盛章氏の訳文草案とそれについての講説を中心として論議がすすめられ、典礼・歴史・言語・民俗・人種等さまざまの話題について好提案が続出し、毎会夜半に及ぶのが常であつた」、「この稿殆ど草案の域を出ないものであるが敢て発表することにした」とある。第二輯には『おもろさうし』第一全四十一首のうち、「第三十三番までの中、やや興味の薄いもの平易なもの数首を省いた」「注釈研究」が載るとあり、第一－九から一一、一三、一五、一八、二四、二六、二八、三〇、三二が省かれている。それに対して、川平資料の第一は、第一－三〇・三二を除いて第一－一から三七までのオモロの本文とそれに漢字を当てた解釈が記されている。さらに、第一－一から二三の途中までのガリ刷りオモロには、オモロの発音を記したと思われるローマ字表記が多くのオモロにされている（活字印刷でも二九や三一にある）。これは、前述した第二輯「編輯後記」にある「ローマナイズした訓読をつける計画」の資料に当たると推測される。すなわち、川平資料は『南島』

Hosei University Repository

第二輯には載らない台北でのオモロ研究会の資料（テクスト）があるという点で、貴重なのである。川平資料は第二の全四十六首が本文とともにそれに漢字を当てたものがあるが、これは第三輯（宮古島特輯）の「おもろさうし研究会（第二回）」に載る『おもろさうし』第二の全首の資料（テクスト）であり、さらに川平資料の第三－二一までは、刊行が予定されていた『南島』第四輯（久米島特輯）に載るはずであった「おもろさうし研究会（第三回）」の「注釈研究」の資料（テクスト）であったと推測される。『南島』第四輯は、残念ながら戦局が悪化するなかで刊行されなかったが、台北のオモロ研究会はその準備をしていたのである。そのような意味でも、川平資料の『おもろさうし』第三の「注釈研究」は貴重である。

以下、〈例3〉のオモロの漢字を当てた箇所を川平資料（上段）と『南島』第二輯所収のもの（下段）で記し、比嘉盛章のオモロの「展読」を示してみる。

〈例15〉 第一－一

川平資料	『南島』第二輯
一、聞得大君ぎや	聞え大君が
降(お)れて　遊(あそ)び	降りて遊び祝(よお)れば
折　祝(よお)れば	天が下

Hosei University Repository

返し
天が下
平げて　在われ
二、豊む勢高子が
三、首里森城
四、真玉森城

平ぎて在れ
二　響む勢高子が
降り*て遊び祝れば
天が下
平ぎて在れ
三　首里森城
降り*て遊び祝れば
天が下
平ぎて在れ
四　真玉森城
降り*て遊び祝れば
天が下
平ぎて在れ

まず、川平資料と『南島』第二輯では漢字の当て方がほぼ同様であることが分かる。つまり、川平資料が台北のオモロ研究会のテクストであり、これが『南島』第二輯の原稿になっていたのである。

Hosei University Repository

また、少々細かな点になるが、川平資料の二節（聯）目の冒頭「豊む勢高子」の「豊む」は消されて、「響む」と「訂正」されている。『南島』第二輯は「響む」という表記である。これは、川平資料の書き込みが川平個人の見解が記されているというより、研究会の議論の中で指摘された「訂正」だと推測される。川平資料の書き込みが、研究会の議論や理解が反映したものであると考える所以である。

比嘉の「展読」は、『南島』第二輯には「二」の「降れて」には＊印が付いており、その説明に「これらの折返し句原歌にはない。原歌は特に必要な場合の外は第二聯以下の折返し句を省略してゐるのが通例である」としている。川平資料（上段）にも「降(お)れて　遊(あそ)び」以下の四行に「折返し」が記され一字下げて表記しているのも、同様な理解をしていると考えられる。全発は比嘉の「示教」を受けて〈例3〉を〈例4〉のように「展読」したとするが、比嘉の「展読」は以上のように全発とは異なる。比嘉の「展読」が「沖縄神歌学会」以降変わったのか不明だが、前述したように「沖縄神歌学会」に近い時期に書かれた「古琉球の国都は首里か浦添か？」では明確に「私の研究仲間たる新おもろ学派によりて採用された展読法」を示している。やはり、〈例4〉は全発が独自に展開した「展読」と考えざるを得ないのではないか。

川平資料、『南島』第二輯では、以下のオモロについても同様な「展読」をしており、「第二聯以下」に「折返し句の省略」があるとしている。ただし、例えば〈例16〉第一－六などは、単純に二行

Hosei University Repository

目以下を「折返し句」とはしていない。〈例15〉と同様に川平資料（上段）と『南島』第二輯所収のもの（下段）を〈例17〉として以下に記す。

〈例16〉第一－六

あおりやへがふし
一聞得大君ぎや
　神楽吉日　取りよわちへ
　按司襲いす
　十百末　ちよわれ
又鳴響む精高子が
又てるかはと　行き合て
又てるしのと　行き合て
又首里杜ぐすく
　降れて　降れ相応よわ
又真玉杜ぐすく
又喜界の浮島

Hosei University Repository

喜界の焼島
又首里杜ぐすく
世掛けにせ按司襲い
又真玉杜ぐすく
襲いにせ按司襲い
又聞ゑ按司襲いや
神楽ぎやめ　鳴響で
又鳴響む按司襲い
おぼつぎやめ　鳴響で

〈例17〉

川平資料

一、聞え大君が
神楽吉日
取り祝ちへ
按司おすひす

『南島』第二輯

一　聞え大君が
神楽吉日とり座ち
按司おそひし
十百すへ在れ

Hosei University Repository

十百末在れ
二、豊む勢高子が
三、天神と行逢て
四、地祇と行逢て
五、首里森城
降りて降り副よわ
按司おすひす
十百末在れ
六、真玉森城
七、喜界の浮島
喜界の焼島
八、首里森城
世掛け二才按司おそひ
按司おすひす
十百末在れ
九、真玉森城

二　響む勢高子が
三　天神（てるかは）と行逢て
四　地祇（てるしの）と行逢て
五　首里森城
*降りて降り副よは
六　真玉森城
七　ききやの浮島
八　ききやの焼島
九　首里森城
*世掛けにせ按司おそひ
一〇　真玉森城
*おそひにせ按司おそひ
一一　聞え按司おそひや
*神楽（かぐらぎめとよ）乞響で
一二　響む按司おそひや

Hosei University Repository

襲ひ二才按司おそひ
按司おすひす
十百末在れ
一〇、聞え按司おそひや
神楽まで豊で
按司おすひす
十百末在れ
一一、豊む按司おそひや
お仏まで豊で
十百末在れ

川平資料と『南島』第二輯では、第七節の「又喜界の浮島／喜界の焼島」を一節とするか（川平資料）、「喜界の焼島」の冒頭に「又」があるものとして二節にするか（『南島』）という違いがあるが、漢字の当て方に多少の違いはあるものの「展読」は同じである。川平資料は明らかだが、「折返し句」を単純に第二行以下の「神楽吉日　取り祝ちへ　按司おすひす　十百末在れ」とするのではなく、たとえば第五節（第五聯）では「降りて降り副よわ　按司おすひす　十百末在れ」を「折返し句」とし

*お仏迄響で

Hosei University Repository

ている。『南島』第二輯でも「降り*て降り副よは」「世*掛けにせ按司おそひ」「お*そひにせ按司おそひ」「神*楽迄響で」「お*仏迄響で」に＊印が付き「これらの句の後には、按司おそひし、十百すへ在れ、の二句が折返し句としてつづくのだろう」としている。比嘉の「折返し句」の捉え方は、機械的ではなく歌詞表記（すなわち、「折返し句」）を考えながら判定していることが分かる。これは連続部にも表記の省略があることを想定して、反復部を想定する考え方に繋がるものである（注8参照）。このような問題意識が、全発の「展読法」にあったことに興味が持たれる。[18] また、全発の「展読法」との関連でいえば、〈例5〉第一－三の最終節「又大君す　守らめ」とあるのに対し、『南島』第二輯は「この句対句を持つてゐない。或は折返し句を伴はない反の如きものだろうか。八重山のゆんた、口説等にもそのやうな形式がある。つらしといふ」とある。これは全発が〈例6〉「反歌」とした捉え方と重なるが、宮城真治も含めてこのタイプのオモロには、最終節を独立させ「折返し句」を想定しない捉え方があったと想像される。[19]

川平朝申『おもろ研究』には、三片の新聞記事の切り抜きが含まれている。記事は、①「須藤利一教授本島調査に来県　川平朝申氏はけふ先発」（「昭一五・七・一九」の書き込み有り）、②「「おもろ」研究に松村教授（台北高校）来県　台湾との連絡を強調」（「昭一五」の書き込み有り）、③「本紙の誕生祝福　台北おもろ双紙研究会」（日付不明）という見出しが付くが、①と②には昭和十五年（一九四〇）の七月に台北のオモロ研究会のメンバーであった松村一雄、木藤才蔵、川平朝申が尚家

Hosei University Repository

本『おもろさうし』の調査で、「来県」したことが書かれている（須藤利一は出発が遅れ参加していない）。このことは、後に記した川平朝申の「わが半生の記―歴史と民俗と人―」（『沖縄春秋』第六号、沖縄春秋社、一九七三年六月刊）や「須藤利一先生と南島研究」にふれられている。[20]『南島』第二輯、第三輯に入った「おもろさうし研究」のオモロの本文は『校訂　おもろさうし』に拠っているが（第二輯「おもろさうし研究」の「まへがき」）、所々に尚家本によって正した注記が入っている。これは、川平等の尚家本『おもろさうし』調査の結果が反映しているのである。宮城真治の草稿でも伊波のテクスト（『校訂　おもろさうし』）に対する批判があったが、台北でのオモロ研究会でもそれは認識されていたのである。研究史的にいえば、この時期に尚家本『おもろさうし』を調査したことは注目される。それは、『校訂　おもろさうし』はその「序」で「私は田島氏より譲り受けた『おもろさうし』を台本とし、尚侯爵家の原本と仲吉朝助氏所有の『おもろさうし』とによつて校訂した」と記しながらも、実際は「校訂本」には尚家本との校合の痕跡がみられない。[21]尚家本『おもろさうし』が研究の俎上に本格的にのぼってくるのは、沖縄県立博物館監修『尚家本　おもろさうし（複製本）』ひるぎ社、一九八〇年刊の刊行を待たねばならない。そのような理由で、川平等の尚家本『おもろさうし』の調査は注目すべきである。尚家本『おもろさうし』の閲覧にあたっては、按司家の血筋を引く川平の存在が大きかったのではないか。

③は沖縄新報発刊を「台北おもろ研究会々員一同」が祝うとする内容の記事である。[22]記事には「昭

Hosei University Repository

和十五年十二月二十四日夜」と記される会員一同の寄せ書きの写真が付くが、オモロ研究会が「既に第十二回を終り巻三を終らうとしてゐる」と記している。前述のとおり川平資料は第三までしかないが、第三は既に昭和十五年（一九四〇）の末の時点で研究されていたことが分かる。先に引いた須藤の「比嘉盛章氏のことども」では、研究会が「約二年間」続いたと記されているが、「昭和十五年九月以降」（第二輯「まへがき」には「十月以来」とある）から始まって「約二年間」続いたとするなら、昭和十六年以降は『おもろさうし』の第四の研究に入っていったはずである。そのテクストはあったのか、あったとしたならば何故川平資料にないのか、興味が持たれる。すなわち、台北のオモロ研究のテクストは、これだけではない可能性がある。オモロ研究会が「昭和十五年九月以降」「約二年間」で終わったのは、ひとつには須藤が第一高等学校へ転任するために昭和十七年三月に台北を去ったためである。[23] それと、「昭和十七年春、十五年振りで東京に帰つた私を追うように、氏〔筆者注。比嘉盛章のこと〕も台北の職を退き、故郷へ帰つたり九州の息子さんの盛健君のところへ行つたり」とあるように、比嘉も台湾を去ったことが理由であろうと考えられる。台北のオモロ研究会が、比嘉を中心としていた証しであるが、この研究会は「昭和十七年」の初頭まで存在し、テクストもそれまでの分があった可能性がある。

Hosei University Repository

まとめにかえて

宮城真治の草稿「『おもろさうしの読法―展読法の研究』に対する卑見」には、宮城が「補填法」に気がついたきっかけが東恩納寛惇『大日本地名辞書』続篇（第二　琉球）冨山房、一九〇九年刊の「羽地の条」に引かれた〈例18〉第十三―八七一を、東恩納が第二節にも「折返し」の記載の省略があると考えて、それを次のように補って記したことにあったとある。

〈例18〉第十三―八七一

しよりゑとのふし
一霜月が　立ち居れば
吾　待ち居れ
真羽地　真羽地や
肝からも　去らん
又若夏が　立ち居れば

東恩納『大日本地名辞書』引用の第十三―八七一[24]

Hosei University Repository

しも月がたちよりば
あんまちよれまはねじ
まはねしは
きもからもさらん。
わか夏がたちよれは
あんまちよれまはねじ
まはねしはきもからもさらん。

比嘉盛章が『南島』第二輯「おもろさうし研究（第一回）」に書いた「初めておもろを読む人のために」の記述でも、伊波普猷の研究を長く紹介した後に「その他におもろの研究家としては東恩納寛惇氏をあげることが出来る。氏の見識のほどは大日本地名辞書沖縄部にその片鱗ながらうかがふことが出来る」と記し、東恩納の「見識」を評価している。これは、宮城の草稿に記される「折返し」の記載の省略を補った東恩納のオモロ理解を指しているのか。また、注6であげた全発の「オモロ研究の二大収穫」の中でも東恩納の『琉球人名考』（郷土研究社、一九二五年刊）をあげ、そこに引かれた第一－二九を「折返し」の記載の省略を補っていることに「正しき読み方」とする評価を記している。『大日本地名辞書』続篇（第二　琉球）や『琉球人名考』は、歴史史料として地名や人名の研究

Hosei University Repository

に相当数のオモロが引かれている。東恩納も、早い時期から『おもろさうし』を研究史料にしていたのである。実は、源為朝の運天上陸を第十四－一〇二七のオモロ「一勢理客ののろの　あけしののろの　雨くれ　降ろちへ　鎧　濡らちへ　又運天　着けて　小港　着けて（以下省略）」を引いて早い時期から論証しようとしたのは、伊波普猷ではなく東恩納であった。[25]『琉球人名考』では他にみあたらないが、『大日本地名辞書』続篇（第二　琉球）には〈例18〉のように第二節にも「折返し」の記載の省略があると考えてそれを補って記したオモロは、第十五－一〇七七（「浦添村」）や第十三－九一二（「今帰仁村」）がある。しかし、他はそのような引き方になっていない。東恩納が「展読法」（あるいは宮城の「補填法」）に繋がるオモロ理解をどれ程意識していたかは不明である。しかし、一部のオモロについては、第二節目以降にも第一節目の詞章が省略されているのではないかと考えていたと思われる。それが、宮城や全発等にヒントを与えたことは間違いなかろう。

前述したように東恩納は、新オモロ学派の台頭に対してそれを尊重しながらも伊波を擁護する立場をとっている。実際のところ、伊波と新オモロ学派のオモロの捉え方には大きな違いがあったのか。全発が「展読法」を展開するにあたって「おもろさうしの読み方―展読法の研究―」に引用された「改訂本の巻頭の伊波さんの例言」は、どのようなものであったか。実は、全発が記す「改訂本の巻頭の伊波さんの例言」とは、『校訂　おもろさうし』に入る「序」の後に付く「例言」のことである。これを全発が「改訂本」としたのは、単純に「校訂本」を「改訂本」と誤ったか、あるいは『校訂

Hosei University Repository

おもろさうし』の「序」と「例言」の内容が、『校訂　おもろさうし』の前年にでた『琉球聖典　おもろさうし選釈』石塚書店、一九二四年刊に収められた「序」と「例言」の、「改訂」にあたる内容であったと考えたか、どちらかだろう。重要なことは、『校訂　おもろさうし』の「例言」は残念ながら『伊波普猷全集』には採られていないのである。これは『全集』が、『おもろさうし選釈』の「例言」と「校訂本」の「例言」とを、同じものとみなして採らなかったと推測される。しかし、ふたつの「例言」は同じではなく、「校訂本」の「例言」は、「校訂本」の「序」とともに『琉球聖典　おもろさうし選釈』以降の伊波のオモロ研究の進展が窺える重要な内容なのである。[26] 全発が「おもろさうしの読み方—展読法の研究—」で引いたのは、『校訂　おもろさうし』の「例言」の二番目の条である。

一オモロの記載方は、出来得るたけ、原本に従つたが、中には多少訂正したところもある。これには、万葉などのやうに、ぶつ続けに書き下さないで、西詩のやうに、一句々々書き並べたところに特徴がある。行*の初めに一或は又の字があるのは、ライン又はスタンザの初めを示す記号に過ぎない。そしてこの又は、一を繰返すの義である。この記号には三通りの使ひわけがあるやうに思はれる。第一、十四の巻の五章のやうに、これが各ラインの初めに附けられるもの、第二、三の巻の一章のやうに、これが各スタンザの初めに附けられるもの。第三、五の巻の三章のやう

Hosei University Repository

に、又が第二若くは第三のスタンザの第一行に附けられて、第二行以下が略された等である。けれどもこれらは兎に角大体の標準であつて、その外にこれらの三形式の混合したもの、あることを知らなければならぬ。

引用で＊印を付した「行の初めに一或は又の字があるのは」（三行目）以下が、『おもろさうし選釈』の「例言」の後に付け加えられた部分である。付け加えられた箇所は、全発が論文で引いたようにオモロの解読にかかわっている。前述したように、これが伊波の『おもろさうし選釈』以降の研究の進展が示されていると考えてよい。伊波は「大体の標準」としながらも「又」記号を基準として、オモロを三タイプに分類している。第一は〈例19〉「十四の巻の五章」（第十四－九八六）、第二は〈例20〉「三の巻の一章」（第三－八八）、第三は〈例21〉「五の巻の三章」（第五－二一四）を例にあげて説明している。以下、「校訂本」の改行に従って例をあげる。

〈例19〉 第十四－九八六

おとまこがふし
一知花（ちばな）　おわる　目眉清（めまよきよ）ら按司（あんじ）の
又知花（ちばな）　おわる　歯清（はぐききよ）ら按司（あんじ）の

Hosei University Repository

（以下省略）

〈例20〉第三－八八

あおりやへがふし
一聞得大君ぎや
おぼつ吉日　取りよわす
首里杜　降れわちへ
按司襲いしよ　君　添わて
おぼつ世わ　みおやせ
又鳴響む精高子が
神楽吉日　取りよわす
真玉杜　降れわちへ
按司襲いしよ　君　添わて
おぼつ世わ　みおやせ

（以下省略）

Hosei University Repository

〈例21〉第五―二一四

あかんこうがいよやにがふし
一首里杜　上て　行けば
夜の明けて
てだの　照り居る様に
又真玉杜上て　行けば

〈例19〉は、反復部（「折返し句」）を持たないタイプのオモロであり、詞章の記載の省略がない。これを、伊波が「又」が「各ラインの初めに附けられるもの」とする説明は理解できる。〈例20〉は、反復部（「折返し句」）を全節にわたって記載するタイプのオモロ（〈例7〉と同タイプ）で、伊波が「これを各スタンザ（筆者注。節のこと）の初めに附けられるもの」とするのも、理解できる。〈例21〉は、第二節に反復部（「折返し句」）の記載の省略が想定できるタイプのオモロで、伊波が「又が第二若くは第三のスタンザの第一行に附けられて、第二行以下が略された等である」とするのも正しい理解だと考えられる。しかも、「その外にこれらの三形式の混合したもの、あることを知らなければならぬ」としており、反復部（「折返し句」）の表記の記載の多様なあり方を考えていることが分かる。それを考えると伊波の「又」記号の理解は正しく、むしろ全発が「おもろさうしの読み方―展読法の

Hosei University Repository

研究―」で展開した〈例4〉等の「展読」は、全発独自のオモロ解釈を前提とした特殊な理解であったと考えられる。これを宮城真治が、草稿で批判したのである。また、比嘉の「展読」も宮城の「補填法」と変わらないものであったと推測される。伊波が先に記した「例言」を歌謡の形式としてどこまで考えていたかは充分には知れないが、宮城や比嘉のオモロの捉え方と大きな違いはなかったのではないかと想像される。東恩納が伊波を擁護した「諸君が大問題にしてゐるおもろ双紙の記載法の如きは、伊波君が夙の昔に研究のプランに組入れるゐる項目であつて、只だまだ〳〵そこまで手が届かないと云ふだけの話で、謂はばそれどころの話ではなかつたのである」(「「おもろ」の父伊波君の研究態度を讃仰して「おもろ」新人諸君に一言す」注5参照)は、根拠のある伊波擁護だったのである。伊波のオモロ研究が「校訂本」以降、第二の『おもろさうし選釈』を生むような歌謡研究に向かわず、多くはオモロを古琉球の歴史や民俗、言語を研究する資料としたために「校訂本」の「例言」が充分に「おもろ新人」等に理解されなかったのだと想像される。伊波としては、忸怩たる思いがあったはずであり、鹿能政直がいうように「後ろから弾丸が飛んできたようなシュック」だったのである。(27)

一九三二年(昭和七)頃から始まった新オモロ学派(「おもろ新人」)といわれる人々の台頭は、確かに伊波の『琉球聖典　おもろさうし選釈』一九二四年刊、『校訂　おもろさうし』一九二五年刊が出版されて、『おもろさうし』が漸く世にでるようになった後の若い世代のオモロ研究者の出現であるといえる。初出不明だが、宮城真治の戦前のオモロ研究だと思われる「おもろさうしのきみに就い

Hosei University Repository

て」（『古代沖縄の姿』自家版、一九五四年刊所収）[28]は、伊波の「君」についての『おもろさうし選釈』の解釈を見事に批判している。また、宮城の「おもろさうしの発音に就いて」（琉球新報、一九三三年二月二十六日から三月六日まで九回連載。『古代沖縄の姿』自家版、一九五四年刊）は、琉球語（琉球方言）が元来三母音であったとする主張で、伊波の『校訂　おもろさうし』一九二五年刊に入った「校正を終へて」、「琉球語の母音統計」（『民族』第一巻一号、一九二五年刊）、「琉球語の母音と口蓋化の法則」（『国語と国文学』第七巻八号、一九三〇年刊）に記された、琉球語が五母音であったものから変化して現在の三母音になったとする伊波批判である。実は、比嘉盛章にも戦前に発刊された平凡社の『大百科事典』一九三二年刊に相当な分量で「リューキューゴ　琉球語」を執筆しており、宮城同様、琉球語が元来三母音からなる言語であったことを主張している。

宮城の『古代沖縄の姿』自家版には「おもろさうしの発音に就いて」を収めた末尾に、一九三三年十二月二日「東京滞在中の比嘉盛章氏」から来た「端書」が載せられている。そこには「おもろさうしの発音に就いて面白く拝読致し候」とあり、続けて「小生のおもろ研究は未だ出版の緒に至らず候得共近く何んとか目鼻が附くものと確信致居候此の閉暇に乗じ平凡社の依頼により大百科事典に琉球の風俗習慣戯曲舞踊等に就き執筆致候。それは小生が郷里にありし時同社の依頼により琉球の言語に就き執筆致候事が可なり同社編輯局並に東京の学界に注意を引きたる為に候」と記して、『大百科事典』に「琉球の三母音説を主張したるのみならず国語の三母音説をも肯定致し候。故に吾等の主張は

Hosei University Repository

やがては中央の学界にも承認せらるる訳に御座候」とある。実際のところ、比嘉は元々琉球語研究に情熱を持っていた人物だったようで、後に須藤利一に会うことになる与那国へ小学校校長として赴任するのも、その理由のひとつは「「おもろ」の研究より日本古代語の探索研究に手をつけ度といふことに他ならない。この研究については是非とも八重山の言語を知ることなしには納まりがつかないのである」（沖縄日日新聞、一九三五年九月二十日）[29]と語っている。比嘉が台湾の雑誌に書いた「琉球語に依る古代国語の新解釈」『台大文学』第二巻一号、一九三七年、同『台大文学』第二巻五号、一九三七年、「琉球語よりみたる万葉語」『台大文学』第三巻四号、一九三八年等は、その後の比嘉の琉球語研究の成果である。平凡社の『大百科事典』には「端書」に書かれているように、比嘉は「風俗習慣戯曲舞踊」の記事を四段組五頁余にわたって記し、そのうちの「リユーキユーゴ　琉球語」の項目は三頁余にわたっている。[30]

それはともかくとして、比嘉が新オモロ学派が台頭した一九三三年の時期に「おもろ研究」を出版しようとして上京していたことは注目される。金城朝永の「沖縄研究史―沖縄研究の人とその業績―」（注23参照）には「展読法の提唱者の一人比嘉盛昇（ママ）氏は、その新発見を携えて昭和七年（一九三二）上京、柳田・折口先生を訪ね、之を中央の学界に発表しようと試みたが、志を得ずして、離京、一旦八重山諸島の離島与那国の一小学校長の職に展じ」云々とある。また、伊波普猷も「おもろ研究の草分けとおもろ双紙の異本」（『沖縄日報』一九三四年一月一日から九日連載）の末尾に「比嘉盛

Hosei University Repository

章君は早くもオモロ研究の結実を携へて中央の学会に進出を試みられた」とし、以下を記している。

数日前、レーンボー・グリルで開かれた、南島倶楽部の集会（大宜味朝徳君主催）に、オモロに関する同君の講演を聴きにいつた比嘉春潮君は、（途中省略）講演中には、沖縄県庁の土木課員を総動員して、中城屋宜の浦の隆起状態を測定した（比嘉君の言葉のまゝ）地質学的研究によつて、『おもろさうし』の中に、千二百八十年前（即ち、欽明天皇時代）のオモロがあることがわかり、オモロにはかうして琉球語で書かれずに、王朝時代の古語で書かれたのがある故に価値がある、といつたやうな驚くべき新説もあつたさうで、この珍説発表の暁には、きつと中央の学者を驚かすだろう、と春潮君は、驚いてゐました。それから春潮君は、私にこの書の序を書いてくれとの著者の依頼を伝へてくれました。最初柳田国男先生に御願ひしたら自分は書かないから、この研究の先輩なる伊波君に書いて貰つたがいゝと言はれ、次に折口〔信夫〕博士の所に持つていつたら、伊波さんが当然書くべきだ、と言はれたとかで二大家の慫慂によつて、遂に私に廻つて来たとのことですが、私は之を身に余る光栄とし、勇を皷して執筆することを快諾しました

伊波は、彼一流の皮肉を交じえて書いている。これによって、比嘉が上京して出版しようとした「おもろ研究」がどのようなものであったか推測される。伊波が比嘉の講演を「オモロにはかうして

Hosei University Repository

琉球語で書かれずに、王朝時代の古語で書かれたのがある故に価値がある」と記しているように、比嘉の「おもろ研究」はオモロを資料とした琉球語にかかわる研究を中心にしていたのではないかと察せられる。出版はなんらかの事情により実現しなかったようであるが、比嘉や宮城が琉球語の研究に強い関心があったことが分かる。新オモロ学派（「おもろ新人」）といわれる二人の研究は、オモロの新たな読解を目指していたというよりもオモロを資料とする琉球語の研究であり、広く琉球研究を目指していたということである。それは、比嘉や宮城のはば広い研究をみれば分かることである。

新オモロ学派が台頭する時期は、島袋全発も含めて東京で活躍する伊波普猷等の琉球研究を学び、その成果を批判する「新人」達が現れてきたのである。新オモロ学派はオモロの新たな読み方として全発の「展読法」が注目されるが、実際は全発の「展読法」は全発独特のものであったと理解した方がよいのではないか。むしろ、「展読法」は宮城真治や比嘉盛章の「展読」（「補填」）が中心であり、これが後に「沖縄神歌学会」のメンバーであった世礼国男の「反復法」に展開するのである。彼等は当時から新オモロ学派などと称されるが、研究の実際は「展読法」にわわかるばかりではなくオモロを資料にした琉球語の研究やさらに広い琉球研究全般にわたっていたのである。帝国大学を出て東京で活躍する二人の権威者、伊波普猷や東恩納寛惇に対して、沖縄在住の若い琉球研究者が台頭してきたのである。[31] なお、比嘉盛章は著書こそ出すことはなかったが、数多くの研究を発表している。その人物についても、須藤「比嘉盛章氏のことども」や東恩納寛惇「比嘉盛章君を憶ふ」（『おきなわ』第

Hosei University Repository

十九号、一九五二年六月刊、全集九巻）等があり、たいへん興味深い。別の機会を待って、その研究と人物像を追ってみたい。

【注】

（1）末次智「宮城真治と新おもろ学派」、中鉢良護「折口信夫の〈沖縄〉と宮城真治」（下）はともに『地域と文化』第八十三号、ひるぎ社、一九九四年六月刊。なお、宮城の草稿は名護市史編纂室に所蔵されている。

（2）図録『川平朝申と沖縄文化』那覇市歴史博物館、二〇一二年九月刊に『おもろ研究』の写真が掲載されている。

（3）島袋全幸「新おもろ学派のこと」『沖縄文化』第四十六号、沖縄文化協会、一九七六年刊。

（4）「東恩納寛惇切り抜き帳」沖縄県立図書館所蔵。

（5）東恩納寛惇「「おもろ」の父伊波君の研究態度を讃仰して「おもろ」新人諸君に一言す」（掲載紙不詳、一九四二年。掲載月日不詳。記事には「十一月廿二日」の日付あり。『東恩納寛惇全集』第九巻、第一書房、一九八一年刊）。また、この東恩納論文をさしている新聞記事「「原形の研究が先だ」新おもろ学派の態度を東恩納教授難ず」（東恩納寛惇切り抜き帳）の見出しに「新おもろ学派」が使われている。これも掲載紙は不詳だが、沖縄日日新聞の可能性が高いのではないか。

（6）伊波普猷『伊波普猷全集』第六巻、平凡社、一九七五年刊。なお、「おもろ神のみせせる」には遺稿があ

Hosei University Repository

り、そこには伊波の「おしかさ」（対句「やりかさ」）に対する新オモロ学派の批判への反論が記されている。これはおそらく島袋全発「オモロ研究の二大収穫　附「やりかさ」「おしかさ」の意義」上・下（『琉球新報』一九三二年十一月十七日・十八日）に対する反論を書き入れたものだと思われる。内容は伊波が「おしかさ」を「おし潰した笠」を被った「賤の男」、「やりかさ」を「破れ笠」を被った「賤の女」としているのに対して、全発は「おしかさ」は『女官御双紙』にも見える神女名だとして「やりかさ」とともに神女と理解すべきだとしている。今日の研究では、むしろこの解釈が支持されている。

（7）以下、オモロは尚家本『おもろさうし』から引用し、適宜私見によって漢字をあてたが、改行は全発論文のままに示す。ただし、尚家本に欠落があるオモロについては、適宜仲吉本から補って記す。なお、全発論文が利用したと考えられる『校訂　おもろさうし』（伊波普猷、郷土研究社、一九二五年刊）では、〈例1〉「歓へ侍ら」は第二行目、「誇り侍ら」は第三行目に記されている。同じく、〈例3〉は「降れて　遊びよわれば」が第二行目、「天が下」が第三行目、「たいらけて　ちよわれ」が第四行目に記されている。

（8）ただし、私見ではオモロの記載の省略は一般的には反復部に多いものの連続部にもあり、しかも反復部と連続部とはそれぞれに一定の意味的なまとまりがあって、双方は原則として直接には意味的に繋がっていないと考えている。すなわち、連続部と反復部の想定は連続部全体の音数的な分量、常套句や二つのパートの一定の意味的なまとまり等を総合的に考えて判断されるものである（拙論「オモロにおける「連続部」と「反復部」の想定」、拙著『『おもろさうし』と琉球文学』笠間書院、二〇一〇年刊所収）。〈例3〉では

Hosei University Repository

「降れて　遊びよわれば」は連続部の一部であり、「天が下」以下が反復部だと考えられる。つまりは、記載の省略の問題とオモロの一節を構成するパートである連続部、反復部の想定の問題は、本来、次元の異なる問題であると考えている。

(9) 仲宗根政善「おもろの尊敬動詞「おわる」について」(仲宗根『琉球方言の研究』新泉社、一九八七年刊)、高橋俊三『おもろさうしの国語学的研究』武蔵野書院、一九九一年刊所収の「第二章　音韻詳論」。

(10) 島袋全発「中山世鑑のオモロ」『琉球新報』一九三三年九月二十一日から二十三日(「天野鉄夫新聞切り抜き帳」沖縄県立図書館所蔵)。

(11) 〈例8〉の表記は全発が利用したと考えられる『校訂　おもろさうし』によっているが、〈例8〉には尚家本、仲吉本にも「聞け〳〵　肝人」には「又」が付いていない。しかも、両本の四行目の表記は「いぢゑて　きけ〳〵　きも人」であり、「聞け〳〵　肝人」の表記が行の冒頭ではない。したがって、「又」の表記が脱落した可能性は少ない。「聞け〳〵　肝人」に付く「又」は、「校訂本」独自のものである。宮城の草稿にも「伊波氏の活字本には本行に「又」あり十一月二十七日の追記にある如く原本には「又」なし。「又」のなき方がよし」と書き入れがある。ここでは宮城は「校訂本」を利用している全発に従って、「聞け〳〵　肝人」に「又」が付いているものとして「填読」していると考えられる。なお、〈例9〉以下のオモロは宮城の草稿にしたがって引く。

(12) 『沖縄県立沖縄図書館所蔵　郷土史料目録』第二版、一九二九年刊、沖縄県立図書館(法政大学沖縄文化研

Hosei University Repository

究所、沖縄研究資料二、一九八二年）。

（13）拙著『コレクション日本歌人選　おもろさうし』笠間書院、二〇一二年刊所収（「ゑけ　上がる三日月や」「ゑけ　上がる赤星や」―巡行に立つ神女―）でも、岩波文庫本を支持して注釈している。

（14）新聞スクラップ資料「琉球学集説」（沖縄県立図書館所蔵）。比嘉の論文は、東恩納寛惇の『大日本地名辞書』続篇（第二　琉球）冨山房、一九〇九年刊と伊波普猷の「浦添考」（『古琉球』沖縄公論社、一九一一年刊）に記される浦添を首里以前の「国都」とする説に対して、首里が「国都」であるという比嘉の批判が展開されている。比嘉の論は独特で相当強引であるが、全発や宮城、同様「おもろ新人」らしい二人の琉球研究の権威者に対する批判である。

（15）須藤利一『南島覚書』東都書籍、一九四四年刊所収。

（16）台北での沖縄研究において、比嘉が中心的な存在であったことは『南島』第二輯に収められた「沖縄の文化を語る（座談会）」（出席、小葉田・金関・松村・中村・木藤・川平・比嘉・三島・須藤）からも窺える。

（17）ただし、第三―四の一部から五、八はガリ刷りになっている（この部分、順番が狂っている）。また、第一―三〇・三二・三六、第三―一五・二〇はない。

（18）なお、〈例17〉の「神楽吉日」には、注があり「かぐら。神にいます処。かぐら吉日、神を祭る吉き日。今も八重山に神日選といふことがある。物忌み豊年祭節祭等は、神意をうかがひ、神意によつて選ばれた日に行ふ」と記されるが、これとほぼ同じ書き込みが川平資料にある。前述したように、川平資料の書き込

Hosei University Repository

みの基本は比嘉の「講説」や研究会の議論が記されたものだと思われる。

(19) 拙論「オモロにおける「連続部」最終節部の表現」(『『おもろさうし』と琉球文学』笠間書院、二〇一〇年刊所収)では、連続部の最終節部が対句を形成しないことがままあることや歌形を変化させることがあり、またその表現が反復部の表現と類似することを指摘し(〈例5〉では係り結び)、オモロの終わり方の表現形式の問題として論じた。

(20) 「わが半生の記—歴史と民俗と人—」には、「尚秀氏(尚泰王の第四王子で首里市会議員長を務めていた)は、侯爵邸の大広間のテーブルに「おもろ双紙」全巻を出して下さった。松村教授は「おもろ双紙」の見事なことに嘆声をはりあげた。(途中省略)私は一週間ほどこの尚家本の閲覧をさせてもらった」とある。この時の写真が、「わが半生の記—歴史と民俗と人—」と図録『川平朝申と沖縄文化』(注2)に載っている。なお、川平の「わが半生の記—歴史と民俗と人—」一〜四(『沖縄春秋』第六〜九号、沖縄春秋社、一九七三年六月刊〜一九七四年一月刊)と「須藤利一先生と南島研究」は、台湾における沖縄研究の貴重な記録が記されている。

(21) 池宮正治「「おもろさうし」概説」(沖縄県立博物館監修『尚家本　おもろさうし(複製本)』ひるぎ社、一九八〇年刊の付録)。

(22) 沖縄新報は「一九四〇年(昭和一五)一二月二五日に、地元の有力日刊紙『琉球新報』と『沖縄朝日新聞』と『沖縄日報』とが統合してできた新聞」(『沖縄県史別巻　沖縄近代史辞典』沖縄県教育委員会、

Hosei University Repository

一九七七年刊）である。

(23) 金城朝永「沖縄研究史―沖縄研究の人とその業績―」（『季刊　民族学研究』第十五巻二号）には「一方、東京では、伊波先生を離れて、仲原善忠氏を中心に、比嘉潮春・島袋盛敏・八幡一郎・金城朝永の外に、台湾を引上げて母校一高に転任した、前記「南島」の編輯者須藤利一をも加え、同人比嘉氏宅で、昭和十七年から、やはり、オモロの研究会を開催した。これは現在の沖縄文化協会同人の例会の母胎をなすものである」とある。須藤は東京のオモロ研究会に参加したのである。この研究会が伊波のオモロ研究批判から始まる戦後のオモロ研究の中心人物、仲原善忠を中心とした会であったことは、興味深い。

(24) 東恩納寛惇『東恩納寛惇全集』第六巻、第一書房、一九七九年刊。

(25) 拙論「琉球の「為朝伝承」」『立正大学國語國文』第五十一号、立正大学國語國文学会、二〇一三年三月刊。第十四－一〇二七のオモロは『大日本地名辞書』続篇（第二　琉球）一九〇九年刊でも引かれているが、一九〇六年四月刊の「為朝琉球渡来に就きて」『歴史地理』第八巻四号にでる。思いの外、東恩納は早い時期からオモロを史料にした論考を記している。オモロ研究の開拓者として、東恩納はもっと注目されてよい。

(26) 『伊波普猷全集』第六巻、平凡社、一九七五年刊は『おもろさうし選釈』をそのまま収録しているが、『校訂　おもろさうし』は「校訂本」の本文と「例言」を除いて、「序」と「校訂本」の巻末に付く「校訂を終へて」を収録している。「日本復帰」をひとつの契機として刊行された『伊波普猷全集』だが、それから四十年余が立った現在、「沖縄学の父」伊波普猷を検証するには充分なテクストとはなりえない問題点が見

Hosei University Repository

えている。

(27) 鹿野政直『沖縄の淵』岩波書店、一九九三年刊の第六章「「孤島苦」と「南島」意識」。

(28) 宮城真治『古代沖縄の姿』自家版、一九五四年刊と、後に新星図書からでた同名の『古代沖縄の姿』一九七二年刊は「第二版」とあるものの、内容は大きく異なる。

(29) 新聞スクラップ（沖縄県立図書館所蔵）。

(30) 平凡社『大百科事典』の「リューキュー　琉球」の項目は、他に「音楽」を田辺、「建築」「絵画」「彫刻」「工芸」を鎌倉芳太郎が執筆している。

(31) 末次智は「伊波普猷と新おもろ学派―ナショナリズムと郷土＝沖縄研究―」（『浦添市立図書館紀要』第七号、一九九六年三月刊）で、新オモロ学派の台頭の背景にはこの頃から全国的に盛んになるナショナリズムと結びついた「郷土研究」があることを指摘している。また、伊波と新オモロ学派の関係を思想史的にアプローチした論考に注27の鹿野政直『沖縄の淵』の「「孤島苦」と「南島」意識」や屋嘉比収『〈近代沖縄〉の知識人　島袋全発の軌跡』吉川弘文館、二〇一〇年刊所収「新おもろ学派の波紋」「新世代の研究者たち」がある。

＊川平朝申『おもろ研究』の閲覧と撮影に際しては、企画展示の担当であった那覇市歴史博物館の川島淳氏にお世話になった。感謝申し上げる。